E08

時間論から見た災害リスクコミュニケーション
Disaster Risk Communication from the Viewpoint of Time Theory

○矢守 克也
○Katsuya YAMORI

This presentation reports how productively Jean-Pierre Dupuy's unique theory of catastrophes contributes to researches and practices in the area of disaster prevention and reduction. The theory proposes that future catastrophes should be regarded "inevitable/unavoidable," because, this, apparently paradoxical, attitude is a critical to take effective countermeasures to "avoid" the catastrophe. This mechanism is clearly and persuasively illustrated in the episode of "Noah in mourning clothes." given by Dupuy. It is important to understand that the theory, with unique assumption of time, is a fundamental and radical antithesis against present disaster risk communication theory and practice, in which precautionary principle is a self-evident axiom.

１．「賢明なカタストロフ論」

本発表では、ジャン=ピエール・デュピュイが提起する「賢明なカタストロフ論」が、防災・減災研究に対してもつ意義について報告する。本理論は、未来のカタストロフ（破局）を回避するためにも、それを「不可避」のものと考える必要があると主張する。

破局を回避するためにも、(いったん)それを「不可避」(宿命のようなもの) だと見なす必要がある ― この一見矛盾に満ちた、わかりづらい命題の意味は、次のような、私たち日本人がごく最近社会的に経験した事実を思い起こすとともに、彼自身が案出した「灰をかぶったノア」のエピソード（寓話）を通じて容易に理解することができる。

２．破局 ― 必然（不可避）と偶有（可避）の交錯

たとえば東日本大震災がそうであるように、破局と呼びたくなるような出来事がおきたとき、私たちはしばしば相反する２つの感覚をもつ。まず、その出来事がおきてしまうと、おきる以前には必ずしもそうではなかったにもかかわらず、それがおこったことは必然（不可避）であったと強く思えるようになる。「地震頻発国にこれだけ原発を作ってしまったのだから…」、「安全性に問題ありと指摘する声もあったのに、電力に依存した便利な生活を優先してしまっていたのだから…」というわけである。「ノアの方舟」で言えば、「あれだけ神を蔑ろにしたのだから、大洪水がおきても不思議ではない」という感覚がベースにあるということである。

しかし、非常に重要なこととして、他方で、これと正反対の感覚も同時に生じる。つまり、出来事がおきてしまったからこそ、あるいはおきてしまった時点から振り返ってはじめて、破局的な出来事を回避できた可能性を痛切に感じとることもできる。「もう少し入念に地震、津波対策をしておけば…」、「原発に依存した社会についてもう少し真剣に考えておけば…」といった感覚である。

つまり、出来事までの過程を不可避の必然（宿命）と見なす事後の視点だけが、逆説的にもそれと同時相即的に過去の中に出来事を回避しうる「他なる可能性」や「別の選択肢」が十分にありえたことを、まざまざと見せてくれるのである。「その対策はちょっとハードルが高いなあ」と思っていた事柄（たとえは、補助電源装置を数メートル高い場所に設置すること）が、(こんな悲劇になることを思えば）実に簡単にできる（できた）ように思えてくるということである。

以上を予備知識とした上で、「灰をかぶったノア」のエピソードについてごく簡単に紹介しよう。ちなみに、ノアとはもちろん「ノアの方舟」のノアである。

３．「灰をかぶったノア」

ノアは、やがて来るかも知れない破局的な出

来事について、周囲の人たちに再三警告していたが、だれも真剣にとりあってくれない。そこで、彼は、古い粗衣を纏い、頭から灰をかぶった。これは喪った肉親を哀悼する者にだけ許される行為だった。すぐに彼の周りに人だかりができた。「だれか亡くなったのですか？」、「亡くなったのはほかならぬあなたたちだ」。意外な回答を怪しむ人びとが「それはいつ？」と尋ねると、「明日だ、明日を過ぎれば、洪水は『すでにおきてしまったこと』になるだろう。…（中略）…私があなた方の前に来たのは、時間を逆転させるため、明日の死者を今日のうちに悼むためである」。この後、ノアは自宅に戻り、方舟造りを再開する。晩になると、一人の大工が門を叩き、ノアに言った。「方舟造りを手伝わせてください。あの話が嘘になるように」。そして、さらにその後、屋根葺き職人がノアの自宅を訪ねた…。

ノアが、事後（その破局が「不可避」であった時点＝起こってしまった時点）の視点をもち込むこと（それをいったん経由したこと）ではじめて、人びとを動かしえたことがポイントである。当初ノアの警告が功を奏さなかったのは、彼の語りや働きかけが「先行する原因と後続する結果」の常識的なフレームワークの範囲内にあったからである。現在大洪水（破局的な出来事）の直前だから、今のうちにそれに対処しましょうという呼びかけは、防災・減災の営みを進めるにあたって、専門家、非専門家問わずだれもが立脚している大前提、言わば、自明中の自明の常識である。しかし、この常識に基づいた実践は必ずしも有効とは限らない。この点を洞察したことが「賢明なカタストロフ論」の最大の貢献である。

他方で、ノアが灰をかぶった途端、つまり事後の視点に立って語りふるまいはじめた途端、人びとの態度は激変し大洪水に対する備えを開始した。言いかえれば、ノアが事後の視点、すなわち、「まだ」おこっていない破局をあえて「もう」おきてしまったものとして語りふるまう（それが不可避であったとしてふるまう）という迂回路をいったん経た上で、破局以前に回帰してきたことが人びとを変えたということである。

４．〈投企の時間〉と〈歴史の時間〉

本理論は、独特の時間的態度、〈投企の時間〉を提起する。〈投企の時間〉では、未来は、現在に対して、「反実仮想的に非依存（独立）」であるが、「因果的には依存」する。つまり、「今と違うことをしたら、未来は…へと変わるだろう」との仮想可能性は排除するが、今なしていることが因果的に未来につながっていることは否定しない。この一見矛盾する時間的態度は、「プロテスタンティズム」のパラドキシカルな態度、すなわち、プロアクティヴな姿勢の「徹底した放棄」（神の絶対的超越性の確保）と「徹底した採択」（世俗内禁欲・勤勉）の並立と同型的である。

他方、これと対置される通常の時間的態度（先に述べたように、現在の防災・減災に関する理論・実践もそのすべてがこの常識的時間論の枠内にある）、つまり、〈歴史の時間〉では、未来は、現在に対して、「反実仮想的に依存」し、「因果的にも依存」している。つまり、上記の意味での仮想可能性を認めるし、実際の因果連鎖も当然肯定する。

〈投企の時間〉を前提にする同理論は、〈歴史の時間〉に立脚した「リスク論」が導く一連の態度（たとえば、事前の備え、予防原則…）―これら通常、非の打ち所なく肯定されている態度こそが、破局的な出来事を招来する元凶だとして断罪する。この態度こそが、「まさか津波が原発を…」を生んできたからである。

さらに、同理論は「運命論」とも似て非なるものである。人びとをして、現在における、“もっともたしからしい”対策（カタストロフに対して）、あるいは努力（ユートピアに対して）に安住させる（ないし、それすら放棄させる）ように働くのが「運命論」であるのに対して、“もっともたしからしくない（現時点では、ほとんどありえないと思える）”対策や努力をも歴史の中から「救い出す」（「叩き出す」；ベンヤミンの言葉を使えば）のが、「賢明なカタストロフ論」だからである。

（参考文献）

ジャン=ピエール デュピュイ（2012）ありえないことが現実になるとき―賢明な破局論にむけて（桑田・本田共訳）　筑摩書房
渡名喜庸哲・森元庸介（2015）カタストロフからの哲学 ジャン=ピエール・デュピュイをめぐって 以文社